

## H26年度 第1回理事会・総会

平成26年度第1回理事会・総会を下記の通り開催いたしますので、ご出席いただきますようご案内します。

日 時：平成26年6月2日（月）

（理事会）午後2時30分より（受付開始2時）

（総会）午後3時30分より（受付開始3時）

場 所：日比谷図書文化館（東京都千代田）

\*議案等の詳細は5月中旬に連絡します。

\*総会終了後に懇親会（会費制）を予定しています。

## 専門部会の動き（4月分）

### 【事業化支援・販売支援③】

国産（秋田県産）黒にんにくのブランド化について検討を行いました。

黒にんにくは、発酵させることにおいて軽減し食しやすく、コレステロール低下や抗酸化作用といった健康食品としての特性を持つ一方で、競合産地が多く、商品としての差別化が難しいなどの課題があります。それらの課題に対し、例えば健康食品としての成分数値化に基づくシニア層向けのPR強化、日常用や土産用といった使用シチュエーションの特化戦略、ターゲットを意識したデザイン・パッケージング、地域産品としてその他商品を含めたブランド化、といった議論が行われました。

今後も当部会ではブランド化を含む販路開拓についての検討を進めていきます。

### 【東北農業復興プラン検討部会】

今回は、南相馬市農業復興プロジェクトについて、これまでの取り組みと今後の予定を説明しました。

また、今後の専門部会を「震災復興プロジェクト」と新たに「コスト削減専門部会」を立ち上げる案について意見交換を行いました。

両テーマともに事業に直結する分野でもあるので、両建てで1つの専門部会として、時間配分を決めて進行してはどうかなどの意見があがりました。

### 【人材育成①②】

今回は人材育成①、②の合同開催とし、農業経営者のトッププロ育成の取り組みと今後の専門部会のテーマ等について検討を行いました。

J-PAO 研修農場でもある㈱サラダボウルが農林水産省補助金交付候補者である「トッププロ育成の取り組み」について、その全体像の説明、その中でJ-PAOが担当する「企業派遣型課題解決ワークショップ研修」の内容について意見交換を行いました。

また、今後の専門部会については、人材育成は1つの専門部会で構成することに確認しました。そして、H26年度のとちぎ農業ビジネススクールと宮崎県の人材育成プログラムの案を説明し、実施内容を確認しました。

## 6次産業化中央サポートセンターの事業が開始されました

J-PAO 会員の株式会社農林漁業成長産業化支援機構が、農林水産省が募集した平成26年度の「6次産業化中央サポート事業（うち6次産業化人材活動支援事業）」の補助対象事業者に選定され、昨年度に引き続き、5月1日より6次産業化中央サポートセンターの業務を開始しました。J-PAOもサポートセンターの運営に昨年度同様に携わります。

## 事務局に新メンバー2名加わる

4月に事務局を退任した2名に代わり、新メンバーが2名加わりました。

○伊藤 美朋（上席コンサルタント）

株式会社日本政策金融公庫より後藤氏の後任として着任しました。

○熊谷 拓也（コンサルタント）

株式会社みずほ銀行より根岸氏の後任として着任しました。

今度ともご支援とご協力の程よろしく願います。

## 主な活動（4/1～5/8）

4/9 第80回企画運営委員会

4/11 南相馬市農業者向け講演会（豊田）

## 特集

### 「サポート人材育成研修」の事業内容報告

今年度、J-PAO Press (会報) では、J-PAO の取り組みを会員の皆様により詳しく伝えるために、特集記事を順次掲載していきます。

第1回目は、農林水産省補助事業（平成25年度 新規就農・経営継承総合支援事業のうち技術習得支援（高度農業経営者教育機関））にて実施したサポート人材育成研修についてです。

#### □ この研修の目的

この事業では、経営感覚に優れた農業経営者育成を担う人材（以下「サポート人材」という）の指導力強化に取り組みました。サポート人材は農業者の相談対応・支援を行う際に、農業者の思いを計画に落とし込むスキルが求められます。

本事業では、サポート人材が農業者の漠然とした事業構想・思いを実現可能な計画に落とし込み、構想実現までの持続的な支援や、その仕組みづくりができるようになることを目的としました。

#### □ この研修の特徴（受講生が行うこと）

この研修では、受講生が、①農業者の実現可能な計画づくりを支援し、②自らが講師となって農業者への研修や授業を行い、③自らと同様のスキルを持った人材を育成するようになることを目指しています。そのため、受講生には、ご自身が行う、農業者経営教育の目標を立て（第1回集合研修時）、その目標達成に向けて今年度活動いただきました。

※J-PAO は目標達成の支援を行いました（直接訪問、電話会議、電話・メールによる相談）。

#### □ 実施日程と参加者数

	参加人数	集 合 研 修			
		集合研修1回目	電話会議		集合研修2回目
		(3日間)	1回目	2回目	(2日間)
第1回 開催	11名	9月2日(月)~4日(水)	10月8日(火)	11月5日(火)	11月25日(月)~26日(火)
第2回 開催	21名	9月24日(火)~26日(木)	10月25日(金) 午前、午後	11月18日(月) 11月22日(金)	12月16日(月)~17日(火)
第3回 開催	16名	10月28日(月)~30日(水)	11月22日(金) 11月28日(木)	12月17日(火) 12月20日(金)	1月21日(火)~22日(水)

**集合研修1回目**：経営理念や経営計画に関する講義、計画作成ツールを使ったグループワーク、各受講生の目標づくり

**電話会議(2回)**：各受講生の目標達成進捗状況の報告と相談、追加情報の提供

**集合研修2回目**：これまでの取り組みの共有、農業経営者教育の事例報告、今後の目標達成に向けての行動計画づくり

**個別サポート**：平成26年3月末日まで、電話・メールによる相談受付、直接訪問による個別サポートを行いました

#### \*参加者の属性

農業大学校職員（13名）、普及センター職員（8名）、農業者（4名）、税理士（4名）  
県・市役所職員（3名）、農業専門学校職員（3名）、中小企業診断士（3名）  
県農業技術指導所（2名）、公社職員（2名）、JA職員、行政書士、金融アドバイザー  
県農業会議職員、農業資材会社社員、コンサルタント

## 往復書簡

今回は、梶谷氏（山梨県 ㈱ファーマーズ・リンク）と当機構理事長の高木勇樹との往復書簡 3 回目です。

拝啓 高木 勇樹様

二月の大雪で雪国と化した当地も、三月に入り春の陽気を感じられるようになりました。固く凍り固まった雪も暖かい日差しで急速に溶け、当社のハウスで栽培中の小松菜も急激な成長を遂げております。

この間、高木様からの返信と併せ、読売新聞での連載を拝読させていただきました。高木様の官僚としての苦悩・葛藤と現在の活動に至る“想い”を少しでも理解できたような気がします。弊職の短い人生経験からは想像もできない、国家を動かすという大業に携わってきた高木様のご経験と今日の活動に、改めて敬服の念を抱きました。同時に、弊職が高木様の年齢になった時に、同じような想いで生きていられるよう、日々精進しなければと改め感じました。

高木様が官僚として農林行政に携わられていた時期は、現在の農政の基盤であり課題でもある農地法や輸入関税、農協、減反等といった難問が山積していたことですが、いずれも弊職がこの世に生を受け、社会に出る前のことで、リアルにイメージを持つことができないというのが正直な感想です。

唯一、弊職が小学生の頃、水稻農家であった両親が、個人を相手にお米の販売を始めたことを思い出しました。始めは京都市外の田舎まで買いに来る一部のお客さん相手でしたが、高校に上がる頃には、京都市に直売所を設け、市内全域に配達しておりました。大学生の頃には、弊職も学校が終わると、南へ北へ配達をして手伝いをしたものです。このような一般農家の経営転換のきっかけとなる農政の変

化点に、高木様は一人の官僚として関わっていらつしやうたということを改めて知りました。

いま、次代の日本農業を担う我々世代は、過去を知りません。目の前にある矛盾や本質性に欠ける現実の中で、現場で歯を食いしばりながら、その現実と闘っているのです。一人でも多くの若手農業者が、過去と現在を理解した上で、夢と希望を持って農業に携われるように、同じ「珍種」として、更なるご指導をいただきたいと考えております。

また、農業、農政のあるべき姿について、高木様のお考えを聞かせていただければ幸いです。

平成二十六年三月吉日

敬具

梶谷 よしみ （かじたに よしみ）

一九七九年 京都府生まれ  
二〇〇三年 立命館大学法学部卒業  
同年四月 豊田通商㈱ 入社  
二〇一〇年四月 実家に戻り、㈱京都ファーム支援  
二〇一二年 山梨県 ㈱イズミ農園に就職・就農  
同年十一月 山梨県にて㈱JPAO 山梨設立・代表に就任  
二〇一四年一月 農場および集出荷施設管理  
㈱ファーマーズ・リンクに社名変更



拝復 梶谷 よしみ様

二月の大雪は恐らく関東各県ではほとんど想定外だったのではないのでしょうか。

暑さ寒さも彼岸までと言いますが、東京のソメイヨシノの開花宣言は三月二十五日。桜花散り敷く中での入学式を迎える学校が多いのではないのでしょうか。

私は常々思うのです。ひとりの人間が生きられる時間、経験できる時代は限られています。当然経験する内容も、その受けとめ方も千差万別です。

まして梶谷さんと私のように親子以上の年代差があれば尚更です。加えてどのような仕事であれ、仕事をする環境は、グローバル化の進展、政治・経済それぞれのステークホルダーの利害関係の複雑化などの中で、常に課題をかかえながらも急速に変化し続けています。

一方変化にブレーキをかける既得権益勢力の理解を得るために要するエネルギーも、選挙を通じて政権の権力基盤（正統性）の強弱が決まる仕組みである民主国家では相当のものであります。

「時代の証言者」で伝えたかった事のひとつですが、国民の需めをとらえた変化（私流に言えば「大義」のある変化）は紆余曲折はあつても必ず実現します。

お手紙の中のお米の直売の成功は正に「大義のある変化」の実現です。そのときの経営のものさしが「大義」に合致したのです。

過去と現在の先にある未来。ここでの「大義」を梶谷さんのものさし（感性）私流に定義すれば創造力、想像力、先見性、判断・決断力、直観力などの総合力がどうとらえるか。

目の前にある矛盾や本質性に欠ける現実、私も何度も直面

しましたし、今も直面しています。

でもあきらめません。私一人は微力ですが、これまでの経験・蓄積を、生涯現役の気概を持って、捨て石になって、「珍種」増加と支援のため発信し、伝え続けます。

随分と突き放した、冷たい回答と怒られるのを覚悟で申せば、恐らく農業・農村のあるべき姿は、国や他人に頼むものでなく、自らのものさし（感性）が目指す「大義」によって自ら描いていくものだと思います。

何年か後またこのような機会をもちたいと思います。

敬具

平成二十六年四月吉日

## 高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ  
一九六六年 東京大学法学部卒業農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官  
二〇〇二年 ㈱農林中金総合研究所理事  
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任  
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

